tions.
_____ 1982. *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding.* Cambridge, Mass. : The MIT Press.
_____ 1986. *Barriers.* Cambridge, Mass. : The MIT Press.
_____ and H. Lasnik. 1977. "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, 425-504.
Emonds, J. E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax : Root, Structure-preserving, and Local Transformations.* New York : Academic Press.
Huddleston, R. D. 1971a. "A Problem in Relative Clause Reduction," *Linguistic Inquiry* 2, 115-6.
_____ 1971b. *The Sentences in Written English : A Syntactic Study Based on an Analysis of Scientific Texts.* Cambridge : Cambridge University Press.
石居康男. 1985. "I Have a Topic on Which to Work." 『英語教育』第34巻5号, 72-74.
Jackendoff, R. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar.* Cambridge, Mass. : The MIT Press.
_____ 1977. *$\overline{X}$ Syntax : A study of Phrase Structure.* Cambridge, Mass. : The MIT Press.
Jespersen, O. 1927. *A Modern English Grammar on Historical Principles,* Part III. London : Allen and Unwin.
Jones, M. A. 1983. "Getting 'Tough' with *Wh*-Movement," Journal of Linguistics 19, 129-59.
Lasnik, H. and R. Fiengo. 1974. "Complement Object Deletion," *Linguistic Inquiry* 5, 535-71.
McCawley, J. D. 1988. "Adverbial NPs," *Language* 64, 583-90.
長原幸雄. 1990. 『関係節』新英文法選書第8巻, 大修館書店.
奥野忠徳. 1979.「英語の不定関係節構文に関する一考察」『言語の科学』第7号, 133-55. 東京言語研究所.
Quirk, R. *et al.* 1972. *A Grammar of Contemporary English.* London : Longman.
_____ 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London : Longman.
佐保玲子. 1994.「不定詞関係節に関する覚え書き」『文藝と思想』第58号, 61-74.
杉山　融. 1978.「不定詞関係節構造について」『英語学』第19号, 47-70. 開拓社.

c. This is a *wicked* principle on which to base your actions.

(43) a. This is an *unfortunate* occasion to raise.

b. *This is an *unfortunate* occasion which to raise such a matter.

c. This is an *unfortunate* occasion on which to raise such a matter.

上の例の場合には、関係詞を含む wh 句の移動に制限がないことになる。但し、関係詞が単独で節頭に生じた場合は非文であるから、それを説明し、又、(41a), (42a), (43a)の文法性も説明する(32)は必要である。

本節では, easy-Hard Nuts 構文とodd-Hard Nuts 構文にみられるwh 句の生起に関する制限、即ち、これらの構文では関係詞は単独で節頭に生じることができないという制限を考察し、その制限を説明する(32)を提示した。(32)は不定詞関係節の制限のみならず Hard Nuts 構文の制限をも説明する一般的な原則であることが明らかになった。但し、odd-Hard Nuts 構文については、関係詞を含む wh 句の移動に制限があることを指摘した。又、Hard Nuts 構文にfor 句が生じる場合には、wh 句と for 句が共起することを禁ずる(34)が、(32)と同様に、Hard Nuts 構文も含めた不定詞関係節における wh 句と for 句の共起制限を一般的に説明することも示した。

4. 結　　語

(32), (34)の制限を不定詞節に設定することにより、不定詞関係節とHard Nuts 構文は定形の関係節と同様に考えることができる。つまり、節内のどこかに関係詞によって印される空所があり、関係詞（を含むwh句）が節頭に移動され、それが一定の条件の下で省略されると考えられる。又、(32), (34)は、Hard Nuts 構文も含めた不定詞関係節の制限を説明するより一般的な原則であることになる。

REFERENCES

荒木一雄・安井稔（編）. 1992.『現代英文法辞典』三省堂.

Berman, A. 1974a. "Infinitival Relative Constructions," CLS 10, 37-46.

_____ 1974b. *Adjective and Adjective Complement Constructions in English.* NSF-29 (Ph. D. dissertation, Harvard University).

Bresnan, J. W. 1979. *Theory of Complementation in English Syntax.* New York: Garland Publishing, Inc.

Chomsky, N. 1977. "On WH-Movement," in Culicover, P. W., T. Wasaw, and A. Akmajian (eds.) *Formal Syntax.* 71-132.

_____ 1981. *Lectures on Government and Binding.* Dordrecht : Foris Publica-

c. *an easy violin on which for me to play sonatas

(38b)は(32)に違反するので非文法的である。関係詞が省略された(38a)は、(32)によって文法的であることが説明される。又、(38c)は、(33c)と同様に(34)に違反する。(38c)の非文法性は、(33c)と同じように(34)によって説明される。(34)は(32)と同様に、不定詞関係節とeasy-Hard Nuts 構文のwh 句とfor 句の共起に関する制限を一般的に説明する原則であることになる。

さて、これまで検討した例は easy-Hard Nuts 構文の例であった。しかし、odd-Hard Nuts 構文については関係代名詞が生じないことを既に述べ、例を示した。

(39) a. a stupid violin to play sonatas on
b. *a stupid violin on which to play sonatas
c. *a stupid violin which to play sonatas on

(40) a. an odd sum to work with
b. *an odd sum with which to work
c. *an odd sum which to work with

(39c), (40c)は(32)に反するので非文法的である。wh 句が省略された(39a), (40a)が文法的であることは、(32)によって説明される。問題は(39b)と(40b)の場合である。これらの odd-Hard Nuts 構文では、(39a), (40a)が可能であるから、関係詞は単独で節頭に生じ、(32)によって省略されるが、関係詞を含むwh句は節頭に生じることができないことになる。つまり、関係詞を含むwh 句に移動の制限があることになる。長原 (1990, pp. 67-68) は、不定詞関係節に関して、このような制限は関係節に限らずwh 句の移動を伴うとされるいろいろな構文にも見られるのであるから、不定詞関係節に関する(32), (34)も含めた基本的な考え方を覆すものではないと述べている。この考え方は妥当なものと考える。

M.A. Jones (1983, p. 136) は、odd-Hard Nuts 構文に生じる形容詞と同じように目的語移動の適用されない形容詞であっても、予測に反して、関係代名詞が生じる次の例を挙げている。

(41) a. This is an *unwise* hypothesis to rely on.
b. *This is an *unwise* hypothesis which to rely on.
c. This is an *unwise* hypothesis on which to rely.

(42) a. This is a *wicked* principle to base your actions on.
b. *This is a *wicked* principle which to base your actions on.

(34) 不定詞節には節頭に置かれるwh句と主語に付けられるfor の両方を用いることはできない。

(33c)は(34)に違反する。(34)は、(33c)のような不定詞節が生じないことを説明する。

(32)は不定詞関係節の空所の位置が、(31)のような前置詞の目的語である場合のみならず、動詞の目的語及び主語の場合や be 動詞の補語の場合にみられる同様の制限、即ち、wh 句が単独で節頭に生じ得ないことを全ての場合において説明する原則である。

次に、Hard Nuts 構文にみられる同じ様なwh 句の生起に関する制限とそれをどのように説明し得るかを検討してみよう。先ず、easy-Hard Nuts 構文の場合について考えてみる。

(35) a. an easy violin to play sonatas on
b. an easy violin on which to play sonatas
c. *an easy violin which to play sonatas on

(36) a. a convinient sum to work with
b. a convinient sum with which to work
c. *a convinient sum which to work with

(35c), (36c)は、easy-Hard Nuts 構文においても関係詞が単独で節頭に生じ得ないことを示している。これらの例にみられる制限を説明するために、次の原則が必要である。

(37) easy-Hard Nuts 構文においては、wh 句は省略の可能な要素である限り、必ず省略されねばならない。

しかしながら、(37)は不必要である。なぜなら、前節でHard Nuts 構文は不定詞関係節であることが示されたからである。従って、(35c), (36c)は(32)に違反するので非文法的である。又、(32)は、wh 句が省略された(35a), (36a)が文法的であることも説明する。(32)は不定詞関係節とeasy-Hard Nuts 構文の関係詞の生起に関する制限を共に説明する、一般的な原則であることになる。

次に、easy-Hard Nuts 構文に不定詞の主語を表わすfor 句が生じる場合について考察する。

(38) a. an easy violin for me to play sonatas on
b. *an easy violin which for me to play sonatas on

文を不定詞関係節と認めてはいないが、上述の共通点から、Hard Nuts 構文は不定詞関係節であると考えられる。

3. 2. Hard Nuts 構文の制限

Hard Nuts 構文にみられる関係詞の生起に関する制限とその制限を説明する原則を検討する前に、まず、不定詞関係節にみられる同様な制限とそれを説明する原則について概観しておく。[1)]

次の例をみてみよう。

(31) a. I found an usher from whom to buy tickets.
b. *I found an usher whom to buy tickets from.
c. I found an usher to buy tickets from.

(31)においては、不定詞関係節の前置詞の目的語の位置が空所（gap）であり、それを印す関係詞を含む句(wh句)が(31a)では節頭に移動している。(31b)では、関係詞のみが節頭に移動され非文である。(31c)では、節頭に移動された関係詞が削除されている。(31)の例から、不定詞関係節では、関係詞のみが単独で節頭に移動され、削除されずに残ってはならないという制限があることが明らかである。[2)] この制限を説明するために、次の原則が必要である。

(32) 不定詞関係節においては、wh句は省略の可能な要素である限り、必ず省略されねばならない。

(32)により、wh 句が削除された(31c)が文法的であることが説明される。但し、(31c)のような形の文は、wh 句移動の際に前置詞が残留できない場合には不可能である。

次に、不定詞の主語を表わす for 句がある場合の例をみてみよう。

(33) a. I found an usher for Mary to buy tickets from.
b. *I found an usher who for Mary to buy tickets from.
c. *I found an usher from whom for Mary to buy tickets.

(33b)のwh 句が省略されると(33a)になる。(32)は(33a)が文法的な文であることを説明する。又、[3)] (33c)は不定詞節に共通する次の原則によって、その非文法性が説明される。

1）不定詞関係節にみられる関係詞の生起に関する制限とその制限を説明する原則について、詳細は佐保（1994）を参照。
2）この原則は、長原（1990）に基づき、佐保（1994）で提示したものである。
3）この原則も長原（1990）に基づき、佐保（1994）で提示したものである。

再構造化 (restructuring) が働いて、easy-Hard Nuts 構文がodd-Hard Nuts 構文と重なり合うと考えている。

3. 1. 不定詞関係節とHard Nuts 構文

Berman (1974b) は、Hard Nuts 構文は、第1に述語の位置 (be 動詞の後の位置) にしか生ぜず、第2に他に付加修飾語をとらず、第3に不定冠詞としか共起しないという理由からAPであると分析している。しかし、杉山 (1978) が指摘しているように、これらの理由からHard Nuts 構文をAPであると考えることはできない。特に、第3の特質はHard Nuts 構文がNPであることを表わしている。Hard Nuts 構文の主要語は、次の例にみられるように、複数形となることも可能である。これは、まさにHard Nuts 構文がNPであることを明らかに示している。

(28) a. They are easy men to get along with.
b. These are hard typewriters to work with.
c. Those are tough tools to do it with. (杉山 1978)

又、不定詞関係節とHard Nuts 構文は、共通している点がいくつかある。先ず、不定詞関係節もHard Nuts 構文もNPであり、関係代名詞が生じることがある。又、不定詞関係節とHard Nuts 構文に生じうる節は不定詞節である。更に、杉山 (1978, p.65) は、不定詞節の述部に [-self-controllable] な述語、即ち、いわゆる状態を表わす述語は生じ得ないことを指摘している。[1)]

(29) a. *a lady for my daughter to resemble
b. *a lady to be small in height
(30) a. *an easy lady for my daughter to resemble
b. *a difficult man to know (杉山 1978)

Hard Nuts 構文が不定詞関係節と比べて、より複雑な様相を呈すること、又、不定詞関係節よりも更に厳しい制約をうける構文であることは明らかである。例えば、不定詞関係節は定・不定冠詞のいずれとも共起できるが、Hard Nuts 構文は不定冠詞としか共起できない。又、特にHard Nuts 構文は形容詞と不定詞節が密接に関係し、これらの全体が1つのまとまりとなって主要語を修飾している点などである。Berman (1974a, 1974b) は、Hard Nuts 構

1) [-self-controllable] な述語については、奥野 (1979, pp.139-141) が、不定詞関係節の特性の1つとして、その補文の述語には[-self-controllable]なものは生じ得ないことを指摘している。杉山 (1978, p.52, 脚注1) も参照。

(22) a. an odd man to have gotten involved in something like that
b. *an easy man to have gotten involved in something like that

(23) a. an unlikely man to be living in Paris
b. *a hard man to be living in Paris

第4に、easy-Hard Nuts 構文には関係代名詞が生じるが、odd-Hard Nuts 構文には生じない。[1)]

(24) a. an easy violin on which to play sonatas
b. a convenient sum with which to work

(25) a. *a stupid violin on which to play sonatas
b. *an odd sum with which to work

又、次の(26c)，(27b)，(27c)の例は、不可能である。従って、Hard Nuts 構文においては、関係詞が生じる場合、(26c)，(27c)のように関係詞が単独で節頭に生じてはならず、又、(27b)のようにwh 句とfor 前置詞句が共に節頭に生じてはならないという制限がある。[2)] この制限は不定詞関係節の場合と同じものである。

(26) a. an easy violin to play sonatas on
b. an easy violin on which to play sonatas
c. *an easy violin which to play sonatas on

(27) a. an easy violin for me to play sonatas on
b. *an easy violin on which for me to play sonatas
c. *an easy violin which for me to play sonatas on

これらの例にみられるwh 句の生起に関する制限については3. 2.節で考察する。

easy-Hard Nuts 構文とodd-Hard Nuts 構文に生じるfor 前置詞句は、2. 1.節でみた類似点、第7と第8は共通であるが、相違点第1、第2、第3が認められるので、Berman (1974a, 1974b) は本質的に異なるものと分析している。即ち、easy-Hard Nuts 構文の場合は、for NP [to VP] と分析し、for NPは主節の構成素であるのに対し、odd-Hard Nuts 構文の場合は、[for NP to VP] と分析し、for NPは不定詞の主語であると考えている。そして、2種類のHard Nuts 構文が統語的に同じ振る舞いをする場合には、何らかの

1) Berman (1974b, p.333) 又、例(24a)はp.33とp.330に、(24b)は p.33に、(25a), (25b)は、p.333に挙げられている。

2) Berman (1974b, p.330)

(16) a. Sam is a hard man, *as you know*, for me to get along with.
b. *Sam is a hard man for me, *as you know*, to get along with.
(17) a. Sam is an odd man, *I would think*, for him to confide in.
b. *Sam is an odd man for him, *I would think*, to confide in.

以上、Hard Nuts 構文に生じうる形容詞は、文主語をとり、for 前置詞句を伴う形容詞であること、生じうる節は不定詞節であること、その主要部名詞は不定冠詞とのみ共起し、他の修飾語句は生じえず、しかも、特定的な名詞は生じえないことが示された。又、Hard Nuts 構文が生じうる位置は述部(be 動詞の後) のみであることも示された。最後に、Hard Nuts 構文においては、for 前置詞句と不定詞節は1つのまとまりを成していることが示された。

2. 2. easy-Hard Nuts 構文とodd-Hard Nuts 構文の相違点

第1に、odd-Hard Nuts 構文では for 前置詞句に虚辞(expletive)のthereや慣用句の切れ端 (idiom chunk) が現われるが、easy-Hard Nuts 構文では不可能である。[1)]

(18) a. This is an odd paper for there to be so many mistakes in.
b. *This is an easy paper for there to be so many mistakes in.
(19) a. Max is an unlikely person for advantage to be taken of.
b. *Max is a tough person for advantage to be taken of.

第2に、easy-Hard Nuts 構文の意味上の主語を表わすfor 前置詞句は、疑問文形成変形 (Question Formation) や関係詞節化変形により文頭に移動できるが、odd-Hard Nuts 構文の場合には不可能である。[2)]

(20) a. For whom was that an easy test to pass ?
b. *For whom was that an odd test to pass ?
(21) a. the man for whom Mary is an easy person to fall in love with
b. *the man for whom Mary is a likely person to fall in love with

第3に、easy-Hard Nuts 構文の意味上の主語は、主要部名詞と同一指示的(coreferential)であってはならないが、odd-Hard Nuts 構文の場合には可能である。[3)]

1) Berman (1974b, p.316)
2) Berman (1974b, pp.316-17)
3) Berman (1974a, pp.40-41)

第5に、Hard Nuts 構文の主要部名詞 (head noun) の位置に意味内容が特定的 (specific) な名詞は生じない。[1)]

(11) a. *a hard *Frenchman* to work for
b. *an impossible *encyclopedia* to read
c. *an odd *screwdriver* for him to be using
d. *a pleasant *Assistant Professor* to study with

第6に、Hard Nuts 構文は、述部 (be動詞の後) にしか生じない。[2)] 従って、主語、目的語、前置詞の目的語の位置には生じない。

(12) a. **a pleasant girl to talk to* came to see me yesterday.
b. *Joe bought *an easy violin to play sonatas on.*
c. *Mary works for *a hard man to get along with.*

但し、「非指示的な」(non-referential) 解釈を受ける文脈であれば、述部以外の位置でも容認性の度合いは高くなる。[3)]

(13) a. ?You'll never find *a pleasant girl to talk to* in this city.
b. *?I'm looking for *an easy boss to work for.*
c. *?Joe has never dated *a hard girl for me to like.*

第7に、Though 構文移動 (Though-Movement) によって文頭に移動される要素は形容詞と名詞であり、for 前置詞句も共に移動することはできない。[4)]

(14) a. *Hard man though* Sam is for me to get along with...
b. **Hard man for me though* Sam is to get along with...
(15) a. *Odd man though* Sam is for him to confide in...
b. **Odd man for him though* Sam is to confide in...

第8に、挿入表現 (parenthetical expression) は、主要部と for 前置詞句の間に挿入できるが、for 前置詞句と不定詞節との間には挿入できない。[5)]

---

1) Berman (1974b, p.361) は、Hard Nuts 構文に生じる主要部名詞は非常に厳しく制限され、殆ど意味内容がないと記し、(11)の例を挙げている。意味内容が特定的な名詞は生じないという表現は、荒木・安井 (1992, p.718) による。
2) Berman (1974b, p.60-61)
3) Berman (1974b, p.61)
4) Berman (1974a, p.42)
5) Berman (1974a, p.41)

(3) a. *an *eager* man to go
b. *a *happy* man to stay home
c. *a *willing* girl to do that

Hard Nuts 構文は、easy, difficult, hard, pleasant 等の目的語移動が適用される形容詞の現われるクラス（以下、easy-Hard Nuts 構文）と、odd, idiotic, stupid, sensible 等の目的語移動が適用されない形容詞の現われるクラス（以下、odd-Hard Nuts 構文）の２種類に分類される。先ず、２つのクラスに共通するHard Nuts 構文の特徴を概観する。

第１に、文主語をとる形容詞であっても、for以外の前置詞をとる形容詞は、この構文に生じることはできない。[1)]

(4) *a *surprising* thing *to* me to see (荒木・安井 1992)
(5) *a *stupid* thing *of* him to do (ibid.)
(6) *an *incumbent* thing *on* him to do (Berman 1974a)

第２に、Hard Nuts 構文に生じることができる節は、不定詞節である。[2)]

(7) a. Joe is an odd man for Mary to be dating.
b. *Joe is an odd man *that Mary is dating.*

更に、Hard Nuts 構文の不定詞節に更に深く従属節が埋め込まれる場合、その従属節も不定詞節でなければならない。

(8) a. Joe is an odd man for Mary to expect Sally to like.
b. *Joe is an odd man for Mary to expect *that Sally will like.*

第３に、Hard Nuts 構文は、定名詞句と共起しない。[3)]

(9) a. *This is *the easy violin* for Joe to play sonatas on.
b. *Max is *the hard man* for me to get along with.

第４に、Hard Nuts 構文には他の修飾語句は生じない。[4)]

(10) a. *Mary is an easy *likeable* woman to talk to.
b. *Sam is an unlikely *cautious* man to get into trouble.

1）Berman (1974b, pp. 335-37)
2）Berman (1974b, pp. 29-30, p. 310)
3）Berman (1974b, pp. 42-43)
4）Berman (1974b, p. 44)

Hard Nuts 構文に関する覚え書き

佐　保　玲　子

1. 序

英語における不定詞関係節は、先行する名詞句を修飾するものである。この先行する名詞句に一定の種類の形容詞が含まれ、後続の不定詞節と共に主要部語（head word）の名詞を修飾する構文がある。

(1) a. a hard man for me to get along with
　　b. an easy lecture for foreigners to follow
　　c. a difficult thing for him to do　　(Berman 1974a)

(2) a. an odd person for him to confide in
　　b. an unlikely place for him to be living
　　c. a crazy thing for him to do　　(ibid.)

Berman (1974a, 1974b) は、この構文をHard Nuts 構文[1]と呼び、その特質を吟味し、分析している。

本稿は、Hard Nuts 構文に現われる wh 句の生起に関する制限を考察するものである。以下、第2節では、Berman (1974a, 1974b) に基づいて、Hard Nuts 構文の特質を概観する。第3節では、問題の制限について考察し、この制限を説明する原則を提示する。この原則は、不定詞関係節に見られる wh 句の生起に関する制限を説明する原則と同じものである。この原則が不定詞関係節の制限のみならず、Hard Nuts 構文にみられる制限を一般的に説明する原則であることを明らかにする。第4節はまとめである。

2. 1. Hard Nuts 構文の特質

先ず、Hard Nuts 構文に現われる形容詞は、文主語として不定詞節をとる形容詞である。従って、eager, happy, willing 等の形容詞は生じない。[2]

1）この名称は、a hard nut to crack（難問）に因む。Berman (1974a, p.37, 1974b, p.1)

2）Berman (1974b, p.309)